

淀川流域の旧石器文化の一様相

中川和哉

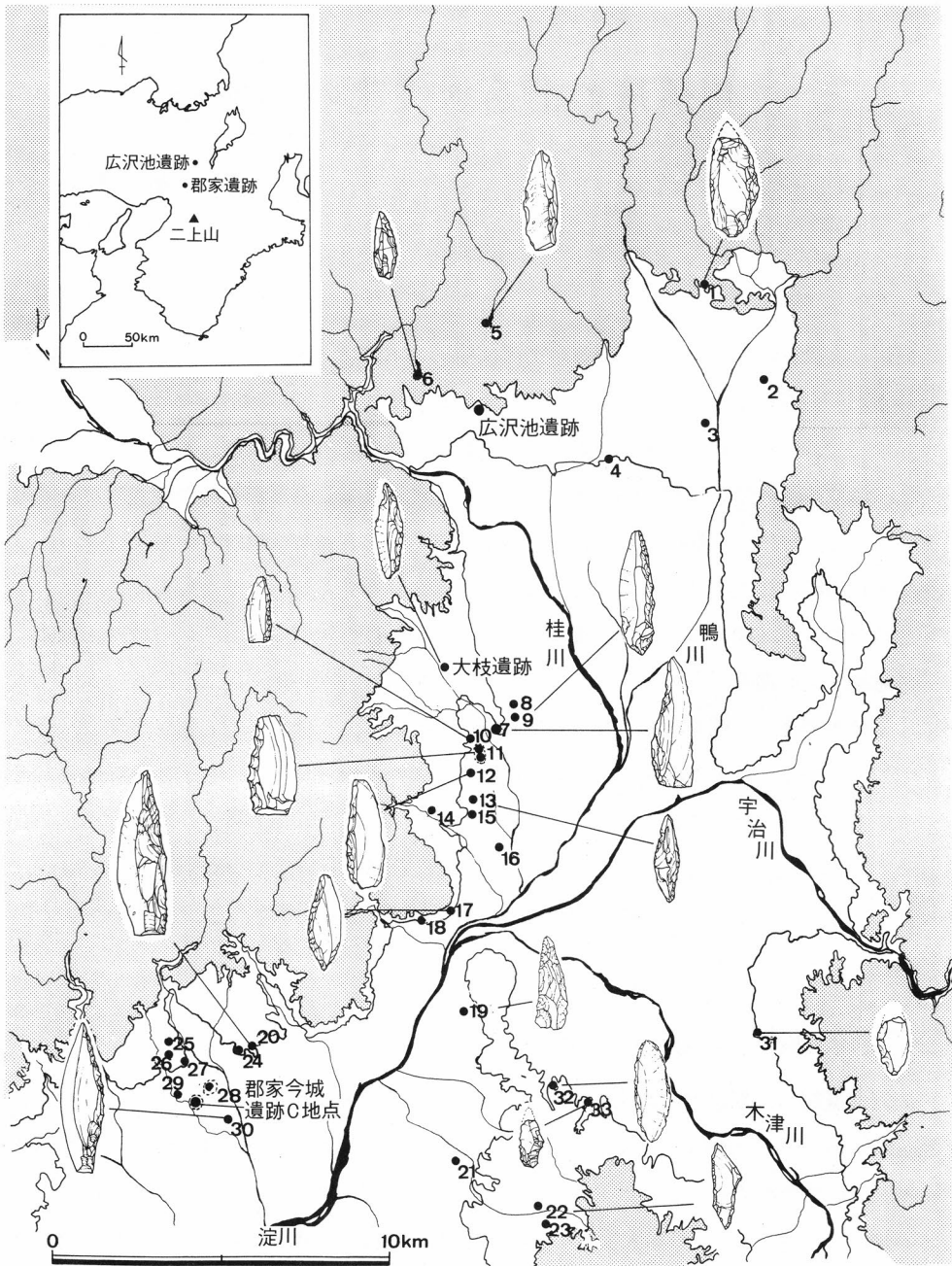
1 はじめに

淀川は大阪湾に注ぐ大河川である。上流は桂川・木津川・宇治川と三河川に別れ名前が変わる。最も西を流れるのは桂川で、その西岸およびこれに続く淀川西岸の地域は、関西において最も旧石器時代の遺跡が集中する地域の一つである。大阪側においては、高槻市の郡家今城遺跡¹・津之江南遺跡²に代表されるように、良好な石器群が発掘調査によって出土している。一方、京都における目的意識をもった、旧石器時代遺跡の発掘調査は、1971年の大枝遺跡³の調査が初めてであった。このような問題意識を持たせたものは、アマチュア等の石器表採活動⁴による分布調査であった。この発掘以後、旧石器時代の遺跡を事前に問題意識をもち調査が行われたことはない。これまで各人の絶え間ない石器の表面採集による分布調査や、開発にともなう発掘調査の増加によって偶然に旧石器が出土し、資料が増加しているが、発掘調査で石器組成が明らかになるほどまとまりをもち、現位置を保っている石器群は検出されていない。本稿においては、京都の旧石器文化の一様相を、これまで多くの人が分析してきたことを整理し、最近の発掘資料、火山灰分析のデータと、比較的まとまった組成を示す広沢池遺跡⁵で著者が採集した最新資料を交えて検討を加えた。

2 淀川流域における国府文化期の石器群

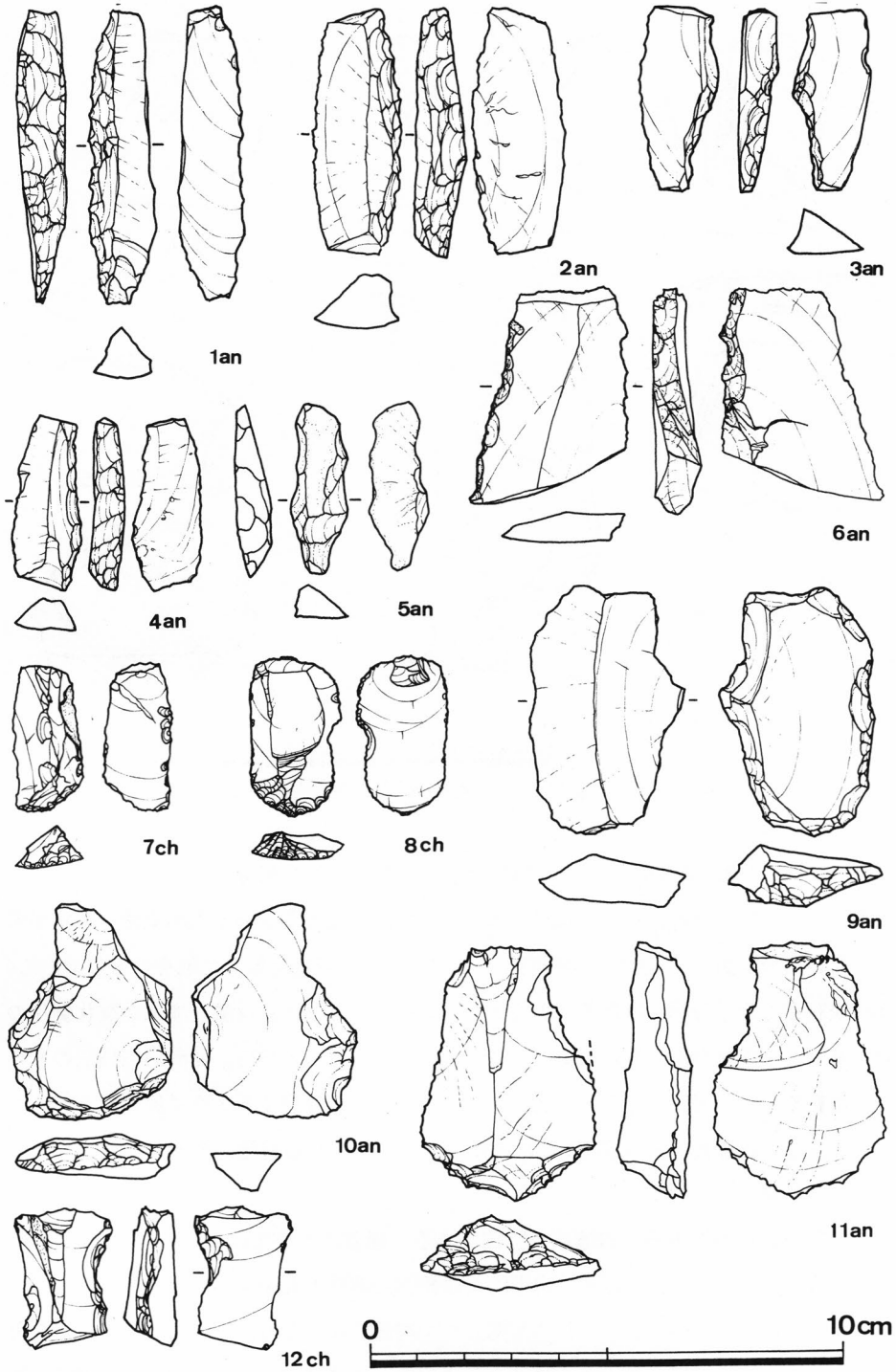
広沢池遺跡 京都盆地における国府文化期と考えられるまとまった資料としては、広沢池遺跡がある。この遺跡は、北山山地の南麓、標高50mの台地上にある東西300m・南北300mの広沢池東岸に位置する。ナイフ形石器・搔器・削器・抉入削器・叩き石・石核・剝片・石鏃が発見されている。組成の中において、瀬戸内技法の存在を示す翼状剝片と翼状剝片石核がセットで認められること、国府型ナイフ形石器が主体となっていることから国府石器群と認定できる。

ナイフ形石器の素材となった石材は全てサヌカイトである。石器の剝離痕の観察から、瀬戸内技法により作り出された翼状剝片を利用した国府型ナイフ形石器と非瀬戸内技法の剝片を利用したナイフ形石器の存在からナイフ形石器の素材の取得には、二種類の剝片剝



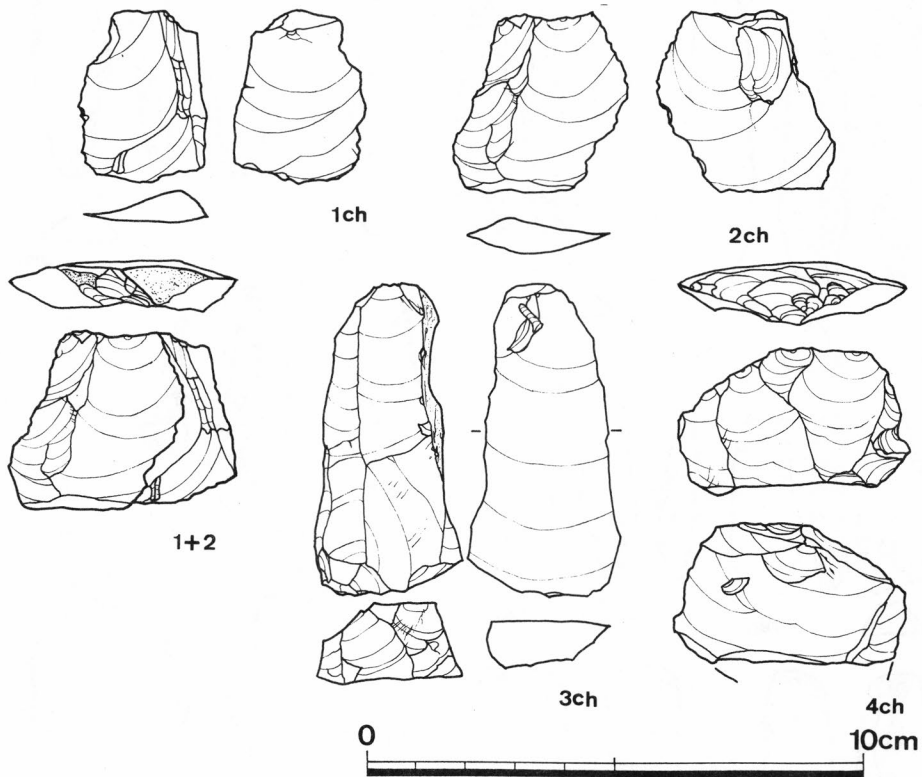
第1図 ナイフ形石器及び関連遺物が出土した主要な旧石器時代遺跡分布図

- | | | | |
|---------------|----------------|--------------|-------------|
| 1. ケン山遺跡 | 2. 京都大学農学部構内遺跡 | 3. 京都御苑遺跡 | 4. 朱雀第六小学校 |
| 5. 沢ノ池遺跡 | 6. 菖蒲谷遺跡 | 7. 北山遺跡 | 8. 殿長遺跡 |
| 9. 頭本遺跡 | 10. 今里遺跡 | 11. 舞塚古墳 | 12. 小池下遺跡 |
| 13. 十三遺跡 | 14. 南栗ヶ塚遺跡 | 15. 山崎遺跡 | 16. 山崎西遺跡 |
| 17. 伊勢寺遺跡 | 18. 交北城ノ山遺跡 | 19. 富士坂宮山遺跡 | 20. 津田三ツ池遺跡 |
| 21. 弁天山D地点 | 22. 弁天山C地点 | 23. 弁天山B地点 | 24. 慈願寺遺跡 |
| 25. 郡家今城遺跡C地点 | 26. 郡家川西遺跡 | 27. 水室遺跡 | 28. 芝ヶ原遺跡 |
| 29. 津之江南遺跡 | 30. 美濃山荒坂遺跡 | 31. 金右衛門垣内遺跡 | 32. 美濃山荒坂遺跡 |
| | | | 33. 美濃山荒坂遺跡 |



第2図 広沢池遺跡出土の旧石器

1～5. ナイフ形石器 6. 翼状剥片 7～11. 掻器 12. 挟入石器



第3図 広沢池遺跡出土の縦長剥片及び縦長志向の剥片

離技術が認められる。国府型ナイフ形石器には、二次加工部位や形態にいくつかのバリエーションがあることが指摘されているが、本遺跡内では、破損品もあるため全体の形状が明らかでない部分もあるが、全てが素材剥片の1側辺にのみ調整を施した細身のものである、これは松藤和人氏の分類では形態A⁶である。細身であるのは、背潰し加工が翼状剥片の底面に及ぶほど素材剥片の形状を大きく変化させているためである。非瀬戸内技法のものは、調整剥離が短い刃部を介し、両側辺が基部にむかって収束するように施されたナイフ形石器である。松藤氏の言う形態C²にあたる。このことから特定の形態と技法・石材との結び付きが解る。

ナイフ形石器以外の主要な器種には搔器がある。搔器については山中一郎⁷氏は、「剥片もしくは石刃(特に細石刃)の端部に規則的な連続細部調整で丸味を帯びた刃部が作り出された石器」と定義しているが、これに準拠しつつ端部でなくとも、山中氏の言うような丸味を帯びた刃部を作り出したものも搔器として扱う。山中氏の定義する搔器を形態A、後者を形態B、円形でずんぐりとしたものをC形態としたい。ここで注意したいのは、搔器

の全てが旧石器時代であるかということが問題として残る。縄文時代にもこの遺跡が利用されているからである。縄文時代の早期の神宮寺式土器⁸に搔器が石器組成の主要な利器となっているが、刃部の形態が直線状であることから国府期にともなうものとは区別できる。

形態Aは第2図の7・8・11までである。素材となった剥片は、石器の背面等の構成から、作出打面から連続的に剥離された縦長剥片であることが解る。これは第3図の1・2に見られる接合例のような剥片と想定できる。11のサヌカイト製を除くと全てチャートが形態Aの石材として用いられている。

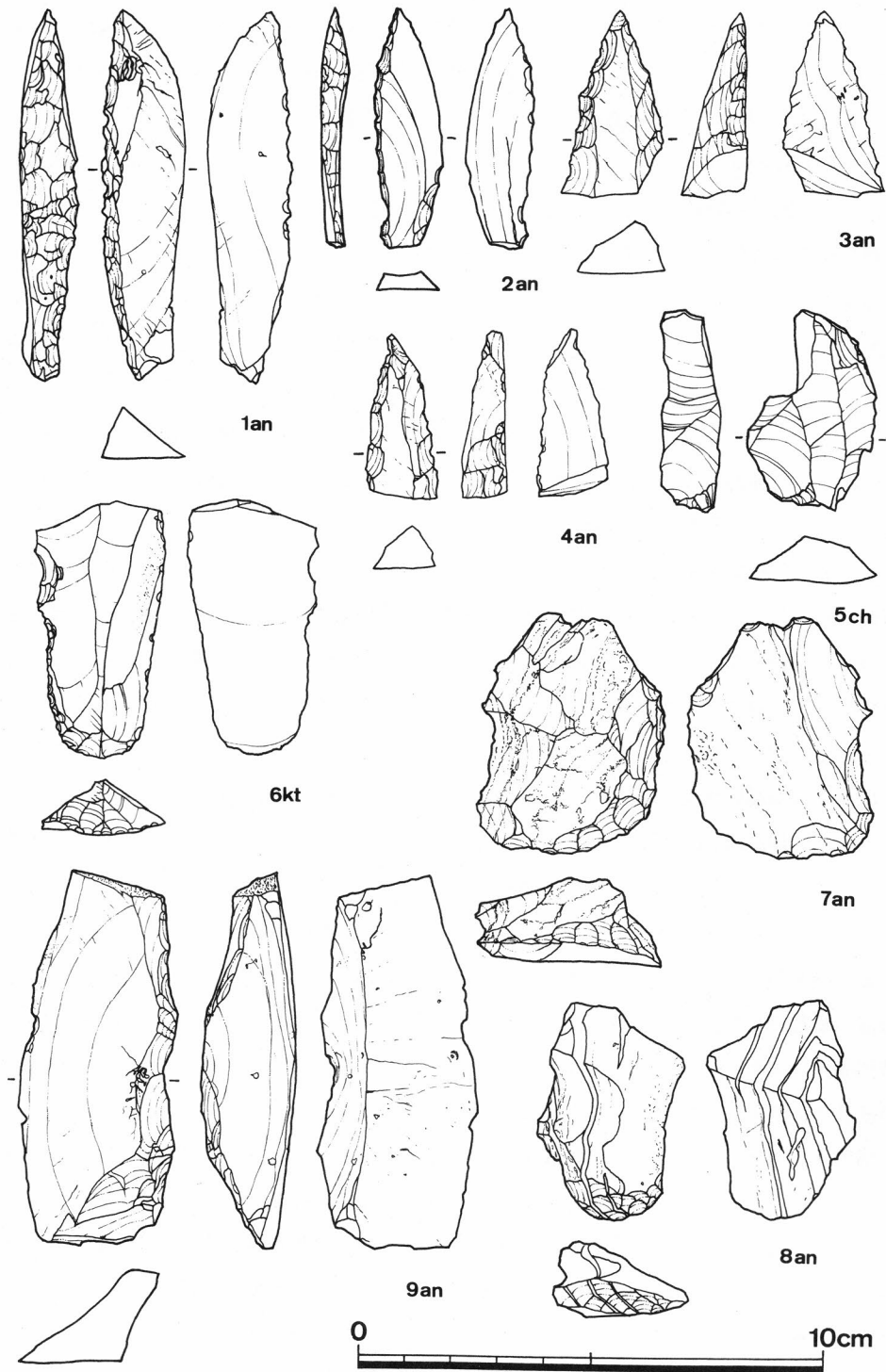
形態Bは第2図の9・10などがある。10はサヌカイト製の翼状剥片を横位に用いた搔器で、インバースリタッチにより刃部が作られている。これは平面形は形態Aに類似している。他に不定形のチャートの剥片の側辺から端部にかけて、主要剥離面側からの加工により半円形の刃部が形成されているものもある。搔器にはサヌカイト以外の石材が多く用いられている。他に形態Cの搔器も認められる。

その他の器種は少量しか出土していないが、12はチャート製の縦長剥片を折取った挟入石器である。剥片および石核を見ると、縦長剥片を連続的に剥がすもの、瀬戸内技法、不定形な横長剥片を剥ぐ技術、打面転移を頻繁にし幅広の剥片を取る技術が認められる。石材との関係を見ると、瀬戸内技法には全てサヌカイトが用いられ、縦長剥片にはチャートが主体として用いられている。

郡家今城遺跡C地点 本遺跡は、淀川の支流である女瀬川東岸に接する、低位段丘状に位置する。標高は19～20mを測る。出土遺物にはナイフ形石器・角錐状石器・搔器・彫器・二次加工のある剥片・剥片・石核がある。

ナイフ形石器は全てサヌカイトを用いており、完成品と破損品を含めると7点出土している。国府型ナイフ形石器を主体にし、非瀬戸内技法による横長剥片を利用したナイフ形石器、縦長剥片を用いたナイフ形石器が若干量存在する。国府型ナイフ形石器の形態は、破損品が含まれているため不確定要素も多いが、ほとんど全てが形態A⁹2である。松藤氏の統計に従うと、ナイフ形石器全体に占める割合は80%をこえている。

搔器は11点出土している。形態Aは2点の出土で、石材には硬質頁岩とサヌカイトが用いられている。素材となっているのは縦長剥片である。硬質頁岩のものは、遺跡内に同一母岩の剥片等も存在しないことから搬入品と考えられる。形態Bは9点あり、そのうち8点はサヌカイトで、残りの1点はチャートである。サヌカイト製のもののうち、3点は翼状剥片石核を転用したものである、他は不定形な剥片を利用したものである。角錐状石器は数点出土している。全てサヌカイト製で、横長剥片が用いられている。角錐状石器は全て破損品であるため、ナイフ形石器の基部であるとも考えられるが、形態C²が存在しな



第4図 郡家今城遺跡C地点出土の旧石器

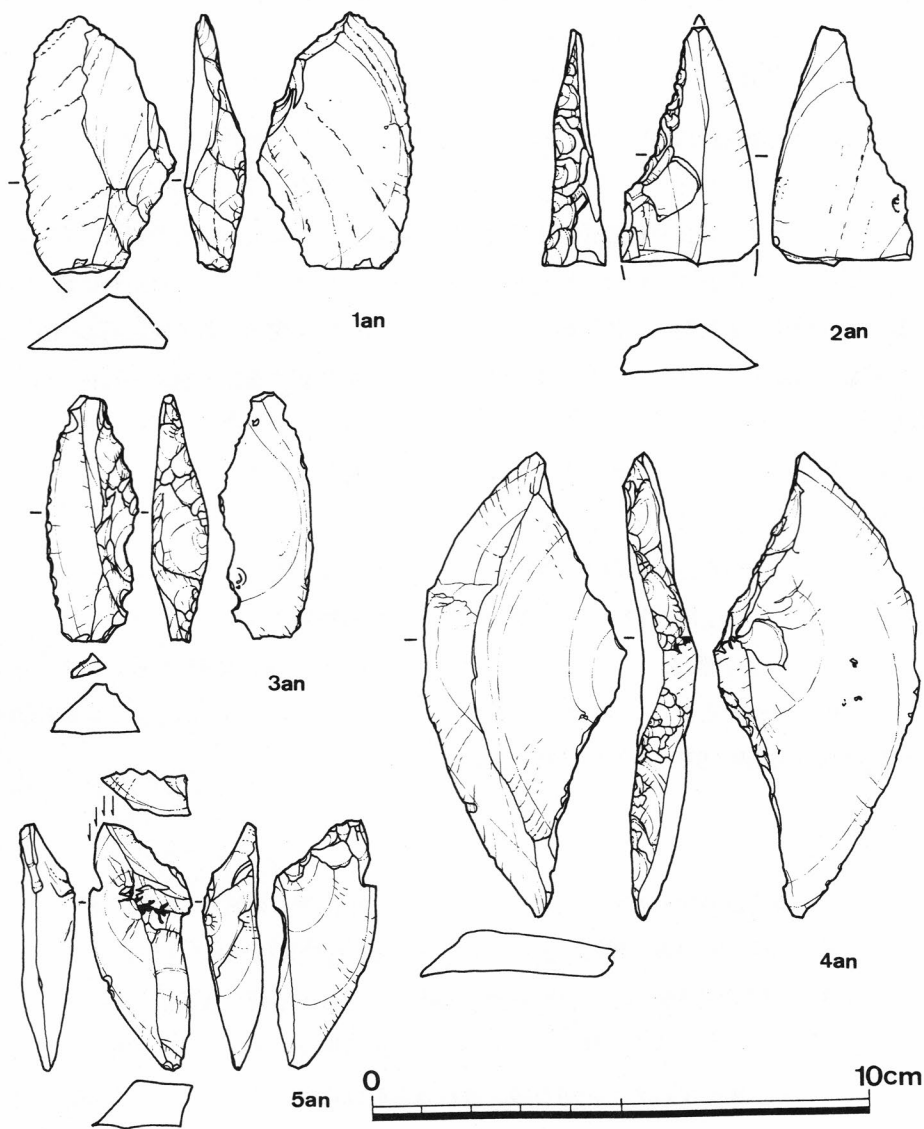
1・2. ナイフ形石器 3・4. 角錐状石器 5. 彫器 6~8. 搔器 9. 石核

いため、角錐状石器と考えるのが妥当であろう。

彫器は4点出土しており、内訳はサヌカイト製1点、チャート製3点である。剥片の中には、縦長剥片が認められ、全てがチャート製である。

以上のことから、2つの遺跡には組成、石材、石器群の構造に共通点が認められる。

この石器群の年代的な位置付けは、角錐状石器がこれまで始良丹沢火山灰(AT)降灰以前にさかのぼる出土例が認められないことから、AT以後と想定できる。麻柄一志氏は、



第5図 鶴峯荘第1地点出土遺物

1～3. ナイフ形石器 4. 翼状剥片 5. 彫器

近畿では見られない硬質頁岩製の搔器の存在から、これが良質の頁岩が産出する北陸地方からもたらされたものと想定し、北陸地域編年に当てはめ、郡家今城遺跡C地点の石器群をAT降灰以後でも比較的新しい時期とした。しかしながら、氏の論文が出された後、調査された兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の下層の石器群¹¹中からは、縦長剥片を用いた搔器が出土している。搔器は、チャートを多く用いる近畿周縁の地域ではAT下位の層準から出土することから、石材の問題は一考の余地があるが積極的に石器群の位置付けを新しくする根拠はなく、AT以後であっても、それほど新しくない時期とも考えられる。

3 原産地の国府石器群

二上山の原産地遺跡においては、石器を含む地層の堆積状態が良くなく、多くの時期のものが混在していることが多く、単一時期の石器組成を抽出することが困難である。しかし、1985・1986年の奈良県鶴峯荘第1地点遺跡¹²の発掘調査の結果、国府石器群と考えられる石器を包蔵する旧石器時代の土坑が検出された。この土坑から出土した遺物はナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核・盤状剥片・盤状剥片石核・楔形石器・楔形石器削片・削器・彫器・石錐・二次加工のある剥片・叩き石・礫・縦長剥片石核・剥片・石核・碎片である。用いられている石材はほとんど全てがサヌカイトで、出土遺物の主体を占めているのは、剥片と碎片である。また、トールの数は、素材剥片に比べ少ない。ナイフ形石器は国府型ナイフ形石器であるが、これまで分析してきた2遺跡とは違い、平面形態がややずんぐりとし、背の部分が鋸歯縁状を呈する。他のサヌカイト原産地で見られる傾向であるが、二上山周辺でも縦長剥片は、石器の素材として積極的に利用されていない。この一括遺物の年代は佐藤氏によると、土坑によって掘り込められた地層中からATの火山ガラスが検出されたことから、AT降灰以後に土坑が掘られたことがわかる。土坑検出面付近で琵琶湖51火山灰(BB-51)が極く微量発見されている。

4 ま と め

これまでの各遺跡の検討の結果、淀川の石器群と二上山周辺の石器群には石器組成・ナイフ形石器の形態・石器群の構造に違いが認められる。松藤氏は、ナイフ形石器の形態と、郡家今城遺跡や広沢池遺跡のナイフ形石器に特徴的に見られる背・腹両面からの対向調整が、後出するナイフ形石器にも見られることから、国府期を古と新に分け解釈している。しかし、このとき後出するナイフ形石器を含む石器群は氏の論文が発表された時点では全てが淀川の流域で検出された資料であった。

年代の手がかりになる近畿地域での角錐状石器年代の最も古い出土例としては、板井・

寺ヶ谷遺跡上層の石器群がある。この石器群はATと大山ホーキ火山灰との間の地層から出土した。新しい年代を示す例としては、地域は異なるが岡山県の中国山地にある笹畝遺跡¹³がある。この石器群は、大山ホーキの上位のソフトローム出土のものである。角錐状石器の存続する年代と国府型ナイフ形石器の存在する年代がほぼ一致する。このことから郡家今城遺跡は、鶴峯荘第1地点遺跡とほぼ同時期であると想定できるので、ここでは石器組成の違いを地域差と考えておきたい。それでは何故このような地域差が存在するのであろうか。もちろん、地域差というときには、石材の原産地と言った場所の違いも考慮しなければいけないが、ナイフ形石器と若干の削器以外の石器をほとんど持たず、縦長剝片を定形的な石器にほとんど用いない二上山周辺の純粋な国府石器群が、チャートを用い縦長剝片を定形的な石器の素材として利用し、サヌカイトに石器の素材をこだわらない特定の石器を持つ文化と接することにより、純粋な国府石器群が影響を受け、組成の乱れを起こしたと想定したい。本稿をまとめるに当たり、松藤和人・佐藤良二・麻柄一志・久保弘幸・松田真一・菅原章太の諸氏に多くの御教授を賜った。ここに記して謝意を表わす次第である。

(なかがわ・かずや=当センター)

- 1 富成哲也・大船孝弘『郡家今城遺跡発掘調査報告書—旧石器時代遺構の調査—』高槻市教育委員会 1978
- 2 大船孝弘ほか「津之江南遺跡発掘調査報告書—三島地方の旧石器時代について—」『高槻市文化財調査報告書』第8冊 高槻市教育委員会 1976
- 3 藤岡謙二郎『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』 1972
- 4 都出比呂志・四手井晴子編『京都府乙訓地方の石器—資料篇—』乙訓文化遺産を守る会 第一 日曜部会 1971
小江慶雄・三上貞二「京都市沢池遺跡」(『京都教育大学紀要』Set. A, No. 39) 1971
- 5 旧石器文化談話会「京都市広沢池発見の石器」(『プレリッード』18) 1974
塚田良道「京都市広沢池遺跡採集の搔器」(『旧石器考古学』26) 1983
佐藤良二「近畿地方におけるナイフ形石器群の変遷」(『旧石器考古学』38) 1989
四手井晴子・木村孝雄・武山峯久「京都市広沢・沢池の石器」(『古代文化』第24巻第10号) 1972
- 6 松藤和人「近畿西部・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸様相」(『旧石器考古学』21) 1980
- 7 山中一郎「搔器研究法」(『史林』59-5) 1976
- 8 松田真一『大川遺跡』山添村教育委員会 1989
下村晴文・菅原章太ほか『神並遺跡』II 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 1987
- 9 注6と同じ。
- 10 麻柄一志「国府型ナイフ形石器と搔器」『考古学と移住・移動』 1985

- 11 久保弘幸・藤田淳・山口卓也「兵庫県における最近の旧石器時代遺跡調査の動向—春日・七日市遺跡と板井・寺ヶ谷遺跡の石器群を中心として—」『日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨』 1987
- 12 佐藤良二「近畿地方中央部における国府石器群—鶴峯荘第1地点の遺物組成を中心として—」『日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨』 1987
- 13 鎌木義昌・小林博昭「岡山県北部の火山灰と石器群」『日本考古学協会1987年度研究発表要旨』 1987

〈参考文献〉

- 田頭澄「京都市右京区沢池遺跡採集のナイフ形石器」(『旧石器考古学』22) 1981
美勢博史「京都市右京区沢池採集の石器」(『旧石器考古学』24) 1982
『史料京都の歴史』第2巻考古 1983
中川和哉「金右衛門垣内発見のナイフ形石器」(『旧石器考古学』34) 1987
鈴木重治・中川和哉「山城美濃山荒坂採集のナイフ形石器」(『旧石器考古学』36) 1988
岩崎誠「乙訓地域の旧石器資料集成」(『長岡京古文化論叢』) 1986
松藤和人「枚方台地と周辺の遺跡」(『大阪府史』第1巻) 1978
加藤晋平・畑宏明・鶴丸俊也「エンド・スクレイパーについて」(『考古学雑誌』55-3) 1970

※ 図面中の範例 ch:チャート an:サヌカイト(安山岩) kt:ケツ岩